

[ちくほう地域研究]

地域に根差した戦争記憶の語り継ぎ：朗読音楽劇「青い目の人形によせて」の試み

筑豊地域研究会会員  
青山 英子

青い目の人形による日米交流

なだらかに続く山陵を背に広がる田園の中、真新しい小学校が建っている。嘉麻市大隈町の嘉穂小学校は平成二六年に旧嘉穂町の五つの小学校が統合された新設の小学校である。校内には旧五校の歴史を留めるメモリアルホールが設けられ、そこに少し古びた愛らしい西洋人形が置かれている。昭和二年、旧大隈小学校にアメリカ合衆国から贈られた青い目の人形ベッキイである。

前年暮れの大正天皇の崩御によりわずか一週間の昭和元年を経て迎え



青い目の人形 ベッキイ  
(嘉麻市立嘉穂小学校所蔵)

た昭和二年。第一次世界大戦後の不安定な国際情勢と不況の中、国内では関東大震災、世界的な軍縮に対する軍部の不満と反動と社会不安が募り、普通選挙法とともに治安維持法が制定され、大正ロマンに象徴される時代が終焉を迎え、軍靴の音がかすかに響き始めたころである。また、このころには日本人の海外移民も行われていた。明治維新により海外への門戸が開かれ、明治一九年に約九〇〇人の日本人がハワイへ移住して以来、農園や鉱山の労働者として新天地を求めて渡米する者も増えていたが、低賃金で勤勉に働く日本人は白人労働者には職を奪われる脅威と映り、排斥運動が起きた。大正時代末期の一九二四年には合衆国で民族差別的な「移民法」が成立して実質的に日本人の移民が全面禁止されるに至ったのである。

日本でキリスト教宣教師として二五年間活動していたシドニー・ギューリックは、このような合衆国の排日運動を目の当たりにし、帰国後、対日移民問題の解決に心血を注ぐことになった。ギューリックは全米キリスト教会連盟下の「国際正義と親睦委員会」の幹事に就任し、一九二六年、「世界児童親善会」を設け、子どもたちの間に相互理解と友情の基盤を作ること

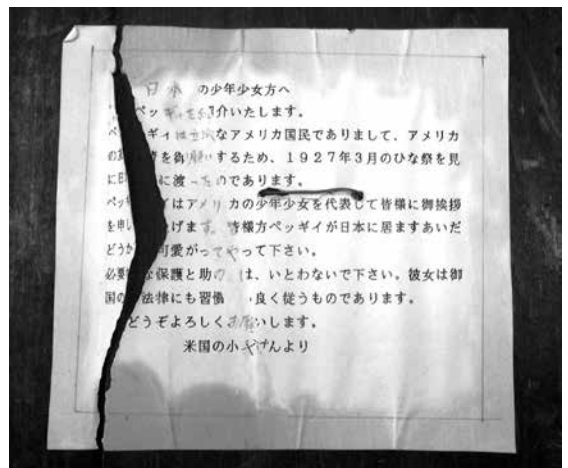
で、国際平和の構築を目指した。この活動の最初の事業が、「青い目の人形」と呼ばれた日本への友情人形の贈答である。ギューリックは、長期の日本滞在から雑祭りや童謡「青い目の人形」など日本の事情に詳しく、雑祭りに合わせて友好親善の人形をアメリカから贈ることを計画したのである。日本政府の協力を取り付け、人形製作会社に一・五フィート（約四五センチ）の規格で人形製作を依頼し、全米の教会を通して人形委員会が作られた。人形は学校関係や慈善団体、個人に三ドルで買い取られ、思い思いの衣服が着せられ、名前もつけられた。更には、一体ごとに手紙が添えら

れ、「人形旅行局」発行の本物そっくりのパスポートや片道乗船券も作られた。こうして全米から集められた人形は一万二〇〇〇体を超え、その中から「ミス・アメリカ」をはじめ五〇〇体が各州代表に選ばれ、昭和二年、横浜と神戸の港に人形を乗せた船が次々と到着したのである。

日本では、ギューリックと親交のあった実業家洪沢栄一が受入の代表として「日本国際児童親善会」を設立し、尽力した。洪沢も当時の日米関係の悪化を懸念し、民間外交による関係修復を試みていた。

三月三日には、明治神宮外苑の日本青年館に皇族や各界の名士、東京市内の児童代表らおよそ二〇〇〇名が集って盛大な人形の歓迎式典が催された。歓迎のために作られ、子どもたちによって披露された歌が、高野辰之作詞、東京音楽学校作曲の「人形を迎える歌」である。その後、人形は全国の小学校などに贈られ、各地各校で歓迎会が開かれた。

その後、日本ではアメリカへの答礼として日本人形



ベッキイに添えられたメッセージ

を贈ることになり、全国の女子児童による一銭募金が始められた。人形師たちによって作られた選りすぐりの市松人形五一体を各県の代表とし、京都の皇室御用達の丸平大木人形舗で製作された「ミス日本」等の七体と合せて五八体の人形が、その年のクリスマスにアメリカに贈られることになった。人形には、箆笥や長持ちなどの花嫁道具や茶道具も添えられ、人形一体あたりの製作費は当時の教員の平均給与の七倍程にもなる高価なものであった。

#### 地域に残る戦時資料の活用

嘉麻市には碓井平和祈念館がある。平成八年、旧碓井町が文化発信の拠点として造った複合施設、琴平文化館の一施設である。嘉麻市には炭坑があったが軍港や飛行場などの大きな軍事施設はなかった。空襲被害も無く、戦時中も比較的平穏に暮らすことができた地域である。そんなところに何故平和祈念館があるのか。教科書に載るような出来事ではなく、くらしの中にあつた戦争、庶民と兵士が体験した底辺の戦争体験を伝えることがこの祈念館の根幹にある。

合併後、平和祈念館では夏休み期間に旧大隈小学校から青い目の人形を借用し、展示室や館内の図書館ギャラリーを利用して一般公開を行ってきた。この展示がきっかけとなり、平成二三年に、筆者が代表を務めるNPO法人の企画で世代を越えた戦争記憶の語り継ぎを目的に、朗読劇のワークショップを実施した。戦争体験者が少なくなる中、次世代への語り継ぎの手段として、平和祈念館の地域資料と青い目の人形を利用してより若い世代に伝えていくことを思い立ったのである。そして朗読劇「このまちに戦争があつたころ」を創作し、子どもと大人が共に取り組むワークショップと発表会を行った。会場は、嘉麻市の織田廣喜美術

館の一室を借り、戦争体験者を招いての座談会も行った。

二年後、改めて嘉麻市教育委員会で地元資料を基にした戦争体験の語り継ぎを企画提案し、平成二六年から朗読音楽劇「青い目の人形によせて」の実施となった。最初の実施校は、旧大隈小学校に残る青い目の人形ベッギイを所蔵する嘉穂小学校である。

#### 朗読音楽劇「青い目の人形によせて」

この朗読音楽劇の目的は、子どもたちが地域に残る戦争の記憶を想像力を働かせながら追体験して戦争と平和について理解を深め考える力を培うこと、公演で幅広い世代に伝えていくことである。そして、誰にとっても不幸であつたあの戦争を「なぜ始めてしまったのか」ということを考える機会を作ることである。そのために一二月八日の太平洋戦争開戦の前後を公演日に設定した。

小学校での取り組みは、ワークショップと公演で構成される。ワークショップでは青い目の人形の話と昭和初期から戦中・戦後までの時代背景を地域資料に触れながら学習し、公演に向けての朗読と歌唱練習を行う。朗読と歌唱の指導講師は、公演の出演者であるプロのフリーアナウンサーと声楽家である。専門家から直接指導を受け、同じステージに立つことは子どもたちが向上心を以て成長するよい機会にもなる。公演では、地域の朗読ボランティアにも協力してもらい幅広い世代でこの劇を作り上げることにした。朗読音楽劇「青い目の人形によせて」は五つの章で構成される。

第一章は、昭和の初めに日米の友情人形として送られてきた青い目の人形と大隈小学校のベッギイの話、第二章は、日中戦争に出征した兵士が家族へ送つ

た郵便をもとに綴った戦争へ行ったお父さんの話、第三章は、日米開戦後、破壊されていった青い目の人形とベッギイの運命の話、第四章は、太平洋戦争末期、日米の激戦地に派遣された父と子の往復書簡をもとにした硫黄島で戦つたお父さんの話、終章では、終戦を迎え、平和を取り戻した日本で再び話題となった青い目の人形とベッギイの話、そしてベッギイからのメッセージで物語はフィナーレを迎える。

第二章と第四章は、直接には青い目の人形とは関係のない話であるが、この地域に住む人々が実際に体験した戦禍を挿入して、人形が辿つた戦争と織り合わせていった。軍事郵便には、検閲などさまざまな制約がある中で戦地から家族や親しい人々に送られた精一杯の思いが込められている。命の言葉とも言える声なき声を伝えたいと考えた。第二章は、この劇を公演する地域に合わせて、地元に残る軍事郵便などを差し替えて再構成できる。地域資料を活かすことでより身近な戦争の話を見る人、演ずる人に感じてもらいたいとの狙いからである。

嘉麻市の小学校での実施状況

二六年度から毎年、



公演スライドより 軍事郵便  
(嘉麻市立碓井平和祈念館所蔵)



公演スライドより タイトル

嘉麻市の小学校で朗読音楽劇公演に取り組んだが、各校の事情が異なり、それぞれに合わせた修正を必要とした。初回の嘉穂小学校は公演時間八〇分であったが、以降は実施校の要望で六〇分に短縮した。本質的な内容を変えずに圧縮するのは大変であったが、結果的により洗練された。

各校の実施状況と課題を紹介する。

嘉穂小学校では校長、担任教諭らと逐次打ち合わせながら計画を練り直していった。取り組んだのは四年生六〇名だったが、戦争についての講話は八月六日の平和学習の全校集会で全児童を対象に実施した。

公演は二月五日の五、六校時、会場は同校に隣接する市の生涯学習施設・夢サイトかほの文化ホールに決まった。ワークショップは四五分授業の二回分を一回として計三回、運動会後の一〇月後半から取り組んだ。

演出にあたっては、六〇名の役割分担に苦心した。一五名で想定していた朗読を細分して二五名に割当て、残りの三五名は劇中のわらべ歌の担当とした。青い目の人形の歓迎式典で歌われた「人形を迎える歌」は全員で歌った。

第一回ワークショップでは、「語り伝える戦争の話」と題して全校児童を前に講話を行った。青い目の人形が日本に贈られた昭和二年前後から昭和二〇年の終戦までを、「戦争って何?」「なぜ戦争するの?」という問いかけをベースに、戦争へと突き進んで行った時代背景と実態について身近なくらしの変化を交えながら話した。平和祈念館の資料を用い、子ども目線を中心に掛けて一年生にも伝わるよう紙芝居風のスライドを用意した。

二回目以降は四年生対象である。青い目の人形ペグイについては、自校所蔵ということで事前に学習し

ていた。改めてこの朗読音楽劇の概略を説明した上で朗読の練習に入った。

講師の栗原景子さんが、広島原爆をテーマにした松谷みよ子作の絵本「まちんと」の朗読を披露し、これから取り組む朗読劇のイメージ作りをした上で指導が始まった。全員で声の出し方などの基本を練習し、朗読担当児童には個別指導を行った。学校には公演までの練習の指導をお願いした。二回目には朗読ボランティアも参加し、講師からはステージに立つ心構えやマナーについての確かな指導がなされた。

歌唱は四年生担任に事前練習をお願いした上で、ソプラノ歌手の大屋省子さんが公演一週間前に仕上げた。練習は体操で体をほぐし歌うための姿勢作りから始まった。「人形を迎える歌」では、当時の子どもたちの気持ちを考へて心を込めることも伝えられた。わらべ歌は口承で、動作も付けていった。練習では、照れもあって手をつなぐことに抵抗を示す児童もいたが、本番の舞台では見事に全員が演じきった。

公演会場の舞台照明、音響などの裏方の仕事は市教育委員会の職員が担当した。

公演当日は午前中に出演者全員で初めて本番通りの稽古を行なっ



嘉穂小学校公演より  
(平成26年 夢サイトかほ)



嘉穂小学校公演より  
(平成26年 夢サイトかほ)

た。本番は一四時に始まり、順調に進行して予定通りに終演した。四年生の出演は第一章のわらべ歌と斉唱、第二章、第四章を構成する軍事郵便の朗読、最後の校歌斉唱だった。軍事郵便や歌詞には現在では馴染みのない言葉や言い回しもあったが、朗読も歌唱も緊張感の中、堂々と演じることができていた。舞台裏の態度も申し分なく、二ヶ月に渡る取り組みで手ごたえのある公演を行うことができた。

終演後、四年生控室前を物語の小学生のモデルである伊藤久次さんが偶然通りかかられたので、咄嗟の判断で子どもたちに一言メッセージをお願いした。一二歳の少年が七〇年の歳月を経て現れるという思いがけない出会いに子どもたちは驚いていたが、戦争を身近に感じてもらうには最高の締め括りになった。

二年目は、嘉穂小学校の教頭が新校長として赴任された牛隈小学校にお願いした。嘉穂小学校は校内設備も整っていた上に公演会場には徒歩で行き来できるなど好条件が揃っていたが、牛隈小学校は自校体育館での公演となり、照明、音響、空調などさまざまな面で課題を突き付けられた。児童数も少なく、演じるのは学年の枠を越えた三年生から五年生までの五二名、朗読を担当する五年生は一二名と前年の半分以下であった。さらに、この取り組みに充てられる授業時数はワークショップに各学年四五分を三回、公演は六〇分にしてほしいとの要望が出された。嘉穂小学校では、打ち合わせも含めて十分な時間を割いてもらえた上に、担任の一人が音楽教諭であったことから歌唱指導もスムーズに進んだが、朗読指導も含めて担任に負担がかかったことは否めなかった。両校の内情も踏まえた上で牛隈小学校からの要望は今後の継続実施のためにも非常に参考になった。

ワークショップでは、まずこの公演に取り組み導入

として出演児童全員に青い目の人形と戦争についての講話を行った。歴史的な予備知識と関心を持ってもらうこと、朗読劇のあらすじと背景をつかんでもらうことが目的である。牛隈小学校の児童は青い目の人形については全く知らないため、嘉穂小学校からベツギイを借用した。終了後、朗読を担当する五年生は、資料として持参した軍事郵便を自発的に読んでみたり質問したりと関心を持ってくれたようだ。後日、五年生からは碓井平和祈念館見学の申し出があり、解説を聞きながら展示を見ることで、さらに戦争について関心を深めていった。

朗読は、栗原さんが教科書でも馴染みのある「ちいちゃんのかげおくり」の朗読を披露した後、具体的な指導が行われた。少人数ということで、各自の指導に時間をかけられた。子どもたちからは表現や言葉の意味などについて自発的な質問も出て、充実した取り組みになった。公演日までは、放課後の自主練習等で仕上げていった。

歌唱は、劇中のわらべ歌と『人形を迎える歌』を三、四年生四〇名が担当した。牛隈小学校には音楽教諭がないため、練習用のデモテープを渡して事前に練習してもらった。ワークシヨップでは、大屋さんの歌に続けて繰り返し歌い、フレーズごとに少しずつ修正し、全員の声が揃うよう仕上げていった。わらべ歌は、身ぶりを交えて歌を覚え、遊びの動作も加わると子どもたちははしゃぎながら練習した。

朗読と歌唱を異なる学年が担当し別々に練習していたことから、学校の要望で、イメージを共有するために合同練習を行い、本番に臨んだ。結果的に、ワークシヨップが6回になった。

公演にあたっては、体育館のステージをいかに舞台らしく作り込んでいくのが大きな課題であった。ス

テージの照明は天井固定の蛍光灯と電球で、多少の明暗差を付ける程度しかできない。体育館には暗幕がなく、いかにして外光を遮るかも課題であった。セロファンフィルムで照明に色をつけ、ブラックシートを使った俄仕立ての暗幕を体育館の大窓にクレールンで貼り付ける等の工夫をした。会場準備は前日朝から、市教育委員会職員が学校職員と行い、一日がかりの作業となった。

公演当日は、それまでの暖かい天候と打って変わって雨交じりの寒い日となった。午前中に出演者全員で稽古を済ませ、一四時から公演を行った。本番では子どもたちは練習の成果を遺憾なく発揮して伸び伸びと演じることができた。合同練習では少し早口だった五年生は丁寧で情感豊かな朗読を披露することができた。三、四年生もプロローグとなるわらべ歌を堂々と演じ、入退場もスムーズに元気な歌声を響かせた。

一般公開となった会場には朗読劇のモデルとなった伊藤さんや縄田先生の教え子も来場されていた。また、公演数日前に糸島市の可也小学校の関係者から青い目の人形「ルース」を連れて見に行きたいという申し出があり、公演開始前の五分を使って二体の人形をスペシャルゲルトとして会場で紹介した。思いがけない人形の対面が実現した。

平成二八年度は、前年度から市内各小中学校に募集をかけてみたが応募はなかった。各校とも学力向上などの課題で現場に余裕がなくなっているらしく、年度が改まってから下山田小学校に打診することになった。学校で直接プレゼンを行い、前年度と同様の計画で実施が決定した。下山田小学校は、公民館施設でもある白馬ホールが同一敷地内に併設され、市民と学校が共用しており、このホールを使ってワークシヨップから公演までの一切を行うことになった。朗読担当の

五年生が二七名ということで前年度の二倍を超える数である。全員が朗読するには台本の見直しが必要となり、第二章と第四章を殆ど子どもたちの朗読で行うことにした。公演までの流れは例年通りで、まず、出演の三年生に「青い目の人形と戦争の話」と題して、歴史的背景を伝え、平和祈念館の関連資料と嘉穂小学校のベツギイを実際に見せながら話をした。各学年なりにそれぞれ関心を持ってくれた。朗読や歌唱は短いワークシヨップの時間で多人数の子どもたちの指導となったが、講師も工夫して指導された。照明や音響など基本的な設備の整った公演ホールで最初から練習できたのが幸いであった。公演当日はギリギリまで退場の所作やタイミング、声の大きさ、テンポなど心配もあったが、本番には見事に演じてくれ、子どもたちの集中力と真剣さには脱帽であった。

#### 文化会館での一般公演

小学校公演の手ごたえから、二八年度は飯塚市の教育文化振興財団にイイヅカコスモスモンでの公演を打診したところ、戦後七〇年の事業団自主事業の扱いで実現できた。

公演にあたっては、地域により密接な内容にするため、台本の第二章を再構成して飯塚市出身将兵の軍事郵便を採り入れることにした。素材には飯塚市遺族連合会が平成二五年に編集発行した戦没者遺稿集「妻よ、子らよ、ふるさとよ」に掲載された軍事郵便を使い、朗読用に編集した。公演時間は六〇分、プロの出演者は、嘉麻市と同様であるが、軍事郵便は朗読ボランティアが担当し、子どもの手紙の朗読と歌唱の部分を募集した子どもたちが演じた。応募した子どもたちの中には嘉穂小学校で朗読・歌唱を担当した児童たちも含まれていた。

公演は、展示ホール

で八月二五日に行い、朗読、歌唱共に二回の集中練習で仕上げた。一般公開ということで音響、照明共にプロが担当し、演出のグレイドも上げた。来場者数は一四〇名、事業団が用意したアンケートには多くの方が終演後も熱心に記入され、共感の言葉をいただいた。



コスモスコモンの公演より (平成28年)

最後に

三年にわたり学校との連携を模索したが、学校現場が抱える様々な課題と実施時間の確保等の負担の大きさが積極的な応募につながらない原因のようである。

実施校は、それぞれに校長、教頭をはじめ担任教諭、人権担当教諭など熱心に取り組んでいただき、大変良好な関係を築くことができた。教育的効果も認めていただけた。先生方へのアンケートからは、戦争を語り継ぐという取り組みの大切さへの理解や子どもたちも戦争について考えることができたという評価の一方、カリキュラム外による学習時間への影響や公演に向けて別時間や家庭学習など多くの時間をかけたこと、歌やせりふの指導に追われ、本来の目的から少し遠ざかったなど、現場の率直な意見もいただいた。

下山田小学校とイヅカコスモスコモンで行った来場者アンケートからは、多くの共感と継続を望む声も聞かれた。

今後の継続を図るには、学校の負担軽減が大きな課題であり、実施方法の再考が必要かもしれない。

附録1

ベッギイに添えられたメッセージ (写真2)

日本の少女少女方へ

ベッギイを紹介いたします。

ベッギイは立派なアメリカ国民でありまして、アメリカの友情を御願するため、1927年3月のひな祭を見に日本に渡ったのであります。

ベッギイはアメリカの少女少女を代表して皆様に御挨拶を申し上げます。皆様方ベッギイが日本に居ますあいだどうか可愛がってやって下さい。

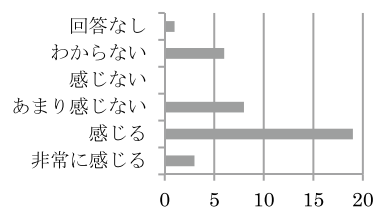
必要な保護と助力はいとわないで下さい。彼女は御国の法律にも習慣にも良く従うものであります。どうぞよろしくお願いします。

米国の小父さんより

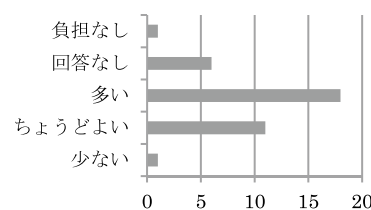
附録2

実施校アンケートより (抜粋)

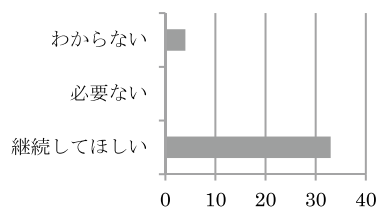
実施校三校、回答三七名。



◇教育的効果は？



◇先生 (学校) の負担は？



◇地域の戦争体験を伝える取組みについて

附録3

下山田小学校来場者アンケートより (抜粋)

来場者数、四五名。三、四〇代を中心に二〇代から八〇代以上まで幅広い年代であった。これからも継続してほしいと回答した人が三二名であった。

感想から一部を紹介する。

・子ども達と共に継続して欲しい。

・朗読していた五年生の気持ちの入り方、すごく良かったです。

- ・子ども達も良かった。歌も流れも、よくできていました。
- ・たいへん良かったです。ところどころで胸に込み上げてくるものがありました。
- ・年一ではもったいない。他に二、三回、日曜日にしてはいいがでしょう。
- ・戦争を知っている者が正しく伝える機会になるようにお願いします。
- ・私は下小四年の時、終戦を迎えました。又、父を硫黄島で亡くしました。学校へ手紙を出したこともあると、私共への手紙で知りました。

## 附録4

コスモスコモンアンケートより(抜粋)

- ・青い目の人形があった事は知っていましたが、戦争による悲しいお話は知らなかった。
- ・初めての機会でしたが孫たちも喜んでおりとてもよかったです。感動しました。
- ・心ももった歌、朗読にすばらしいひと時をいただきました。
- ・本物の軍事郵便を朗読されていた所が良かった。
- ・改めて戦争はイヤだ、ダメだと切実に思いました。

## 附録5

朗読音楽劇台本 ダイジェスト版

青い目の人形によせて

〜このまちに戦争があったころ〜

## 第1章 青い目のお人形がやってきた

昭和という時代が始まってまもないお正月。日本の子どもたちに、海の向こうの国アメリカから、思いもかけないニュースが伝わってきました。

前の年の暮れに亡くなられた大正天皇のご葬儀に帰国される宮さまといっしょに、たくさんアメリカ生まれのお人形がやって来るということです。

「青い目のお人形！」

天皇陛下がお隠れになって暗い気持ちになっていた日本の

子どもたちの心に、ぱっと明るい光がとまりました。

アメリカは広い太平洋の向こうの隣の国です。そのころ、日本とアメリカは少し仲が悪くかけていました。

アメリカにはたくさん日本人が、農場で働くために移り住んでいました。少しでも豊かにくらしたいとまじめに仕事をしましたが、アメリカにはそんな日本人を嫌って、差別する人たちもたくさんいたのです。

一方で、そんな日本とアメリカのように、心を痛めていた人たちがいました。

「二つの国の子どもたちが仲良くできれば、争わずに平和に暮らしていけるだろう。そうだ、アメリカの子どもたちが友情の架け橋としてお人形を送ることにしよう。」

日本の子どもたちがお人形を飾ってお祝いする「ひな祭り」に、アメリカのお人形も仲間入りさせてもらおう、ということになったのです。

そして、アメリカ中で子どもたちがお人形を作り始めました。洋服はお母さんと一緒に、ひと針ひと針縫いあげました。名前もひとつずつつけました。「みなさん、なかよくいたしましょう」と、日本の子どもたちに宛てたお手紙も書きました。

横浜の港に着いたお人形は、大歓迎を受けました。

三月三日の桃の節句には、宮様やアメリカの大使も招かれて、東京で歓迎会が開かれました。お人形を迎える歌も作られて、代表の小学生たちが心をこめて歌いました。

それからすぐに、青い目のお人形は日本中の小学校や幼稚園に届けられました。

大隈の小学校にも青い目のお人形ベッギイがやってきました。チェックの柄でフリルのついたワンピースを着て、ふっくらしたお顔に、パッチリ開いた青い目、寝かせると瞳を閉じて、おなかを押すと「ママァ」と声を出しました。

初めて見る外国のお人形に、子どもたちは大喜び。青い目のお人形がやってくると聞いて、夜も眠れないくらい待ち遠しかった子もいました。

それから毎年、三月三日になると、ベッギイは裁縫室で女の子たちといっしょにおひな祭りを祝いました。

## 第2章 戦争に行つたお父さん

あれから、十年あまりの年月が流れました。

子どもたちに仲良くなってもらって平和に暮らしたいという願いも叶わず、日本とアメリカの仲は、少しずつ悪くなり、となりの中国とも戦争が始まってしまいました。

しゅんじくんのお父さんが戦争に行かなければならなかったのも、中国との戦いが激しくなったころでした。

兵隊さんになったお父さんは、日の丸の旗を振るたくさんの人たちに送られて、白井の駅から汽車に乗って出て行きました。しゅんじくくんが二つになったばかりのころでした。田んぼでは、稲が青々と育っていました。

戦地のお父さんからは時々手紙がきました。

故郷の方は、秋の取り入れや麦蒔きもおわりましたことと思います。

今年の稲作は良くありましたか。私が入隊いたす折は、立派な青田でありましたから、今年は非常にお米が多いと、戦地より思います。

むつ子ちゃんやはつ子、しゅんじは、大変わるさばかりしていることと毎日思います。シズエもお骨折りとはいませんが、父や母と、その日その日を楽しく無事に暮していくように、遠くから頼みます。自分も朝夕、両親の健康と幸福を祈っています。

また、私も病気をせず、日本のために尽くすことのできるように頼みます。

お便りを見ると、大変人々にお加勢を受けて、秋の稲刈りから麦蒔きも早く終わったことを見て、自分も安心いたしました。

うちを出てから七か月あまりになりましたが、今日にいたるまで病気ひとつせず、戦争や演習に参加いたしています。自分たちも敵の弾丸の中を通り、故郷ではちょっと見られませぬ人間の死骸も、よほど見ました。

今年は昨年より大分暖かいそうですね。人の話を聞けば麦も立派に出来たそうですね。喜んでいよ。戦地は麦は一粒も蒔きませんので、見ることができない

よ。

桜もなし。桜の花も二回ながめませんので、あの美しい永泉寺の桜が見たくなつたよ。今年はずいぶん暖かいので、三月のおわりには満開してるそうですね。

自分たちも代用品のリラの花を、広東桜と言って戦友一同、ながめているよ。内地の桜を見るように美しくはありません。

はつこちゃん

げんきよく、あそんでいることと、せんちのとうさんはおもうよ。

しゅんじや、むつ子を、よりかわいがつてあそんでくれよ。おかあさんは、とうさんが、るすをしているから、たいへんいそがしいからね。あさばんは、よくあそびして、おじいさんやばばちゃんを、よろこばせて、りっぱなことになるのよ。せんちのおとうさんも、はたらいで、よいぐんじんになるからね。さんにも、たいへん、おおきくなつていそいで、おとうさんもよろこんでいるよ。たべものに、きをつけよ。ハツ子へ

お父さんが戦争に行つて三年が過ぎようというころ、昭和十六年十二月八日に、とうとう日本はアメリカと戦争を始めた。

ハワイの真珠湾を攻撃して、日本中が勝つたと大騒ぎになつていたころ、しゅんじくんのうちに一本の電報が届きました。

「キヨタロウ ドノ 12ツキ 16ヒ センシ サレル。ツツシミテ チユウシン ヲ アラハス。」

それは、お父さんの戦死を知らせる電報でした。二つのとくに別れたきりのお父さん、しゅんじくんはほんやりとしか思い出せませんでした。

### 第3章 青い目のお人形の運命

戦争はどんどん激しくなつていきました。新聞やラジオは、日本の軍隊があちこちの戦いで「勝つた。勝つた。」と伝えていました。でも、本当は、違つていました。はじめのころは勢いのよかつた日本軍も、だんだん負け始めていたのです。

アメリカは憎い憎い敵国。日本中がそう信じ込んでしまつたとき、昭和の初めに友情のしるしとしてやつてきた青い目のお人形の運命が狂いはじめました。

あれほど大歓迎して喜んだ日本の子どもたちが、憎い敵のお人形だからやつつてると言い出したのです。

いえ、本当は大人たちがそう言つたのです。軍隊からの命令だつたのか、えらいお役人さんが言つたのかわかりませんが、「敵性人形」としてお人形を焼いてしまえということになりました。

こうして日本じゅうの青い目のお人形たちは、悲しい運命をたどつていきました。

大隈の小学校のベツギイもこのままでは焼かれてしまう運命にありました。

「お人形には、何の罪もないのに、かわいそう……」

ベツギイを助けたいと、ひとりの女先生が校長先生に相談しました。ベツギイが初めてやつて来た時、小学生だつたマツエ先生です。

「ベツギイにはじめて会つた時、どんなに嬉しかったことか、今でもはつきり覚えています。ベツギイは、今では子どもたちの大切なお友だちです。アメリカは憎くてもベツギイを憎いと思う子は一人もいません。どうしても、子どもたちにお人形を壊させたくありません。」

「マツエ先生の気持ちはわからなくてもいいが、お国の命令だからどうしようもない。」

「どうにかして助けることはできませんか。」

「とんでもない。国の命令に背いたら、どんな目に遭うかわからん。非国民と言われて、みんなからひどい目にあわされるかも知れんですよ。」

「それでも助けたいのです。」

私がぜんぶ責任を持ちます。どうか、この人形を私に下さいます。」

校長先生は、しばらく黙つて考えていました。

「大隈小学校の青い目の人形は、もう処分しました。学校には、適性人形はいません。」

マツエ先生は、その晩、こっそりとベツギイを学校から持ち出しました。

### 第4章 硫黄島で戦つたお父さん

戦争はどんどんひどくなり、アメリカの戦闘機や爆撃機が、日本にも恐ろしい爆弾や焼夷弾を落としました。

ひさ君のお父さんは、学校の国語の先生でした。小さいころ、家には教え子のお兄ちゃんたちがよく遊びに来ていました。裏の川で魚を獲つたり、お母さんの作つたカレーライスを食べたたり、お勉強をしたり、とても楽しかったのを覚えています。

ひさ君が6年生になつたある日、今からお父さんが戦地にかけると電話がかかつてきました。おじいちゃんとおひさ君は、急いで汽車に乗つて久留米に向かいました。途中、鳥栖の駅で電気を消した真つ暗な汽車とすれ違いました。

久留米に着いた時には、もうお父さんは出かけたあとでした。途中ですれ違つたあの汽車に乗つていたのでしよう。しばらくしてお父さんからハガキがきました。

御手紙有り難う。写真も無事到着いたしました。七月二十三日に怪我をしたそうだね。一体どんなことをしてやつたのかね。痛んだらう。でももう通学とのことで幾分安心はいたしましたもの、まだびつこは治らないかね。お父さんは決して怒りは致しませんから、正直に手紙に書いて送らなさい。写真を天幕の部屋に飾つて、朝夕、久さんの全快の日の速かならんとをお祈り致して居ります。先生が一週二日、教へて下さつていられると、涙が出る程喜んでます。よく勉強して一ヶ月間の欠席を取り返して下さい。勉強が出来ないと良い臣民にはなれませんよ。皆さんの言うことをよく聞いてね。こちらの兵隊さん達も皆元気です。

夏が過ぎ、秋も過ぎ、もうすぐお正月が近づいてきました。ひさ君たち兄弟は、また、お父さんに手紙を出しました。すると、その手紙にびつしりと返事が書き込まれて返つて来ました。

(ひさ君の手紙)

お父さんお元気です。東京のおばさんかえつて来なさいました。

二十八日から一月三日まで冬休みです。また一つ年をとりますね。

学校に行く時、白い息をはき、着物は三枚、それにまききやはん(巻脚絆)をして学校にかよっています。まききやはんは、駅長さんの内からもらいました。お父さんのおられる所は今でもあついでですか。シヤツ一枚でよいのですか。こちらでは三、四枚着なければなりません。僕は毎日毎日お宮にまいっています。では元気で働いてください。

(父の返信)

お手紙有り難う。元気で通学中とのことで大変うれしく思います。お父様も元気で。安心して下さい。お父様も毎日毎晩、写真を出して見ている、久ちゃんが元気で勉強の出来る様に、神様方にお祈りして居ります。きつとよい子になって下さい。

よく叔父さん方の言うことを聞いてね。もうすぐ中学の考査ですね。しっかりと勉強して入学出来たという、うれしい通知をして下さい。

漢字をもっと練習して良くおぼえなさいよ。ではさようなら。

(まさ君の手紙)

お父さんお元気ですか。ほくも元気で、川ばたを白い息をはきながら通学しています。お父さんお手紙、ありがたくちようだいしました。家中元気にしております。又、朝早く日吉宮にまいり、お父さんの武運長久をいのっています。今日は大正天皇祭です。今日学校は休みです。

もう麦まきもすみ、もうぼつぼつめが出しました。まだはつきりはしませんが、もうすぐ冬休みだそうです。今度通告ひよのくるのをたのしみにしております。学校では、増産増産が叫ばれています。私くしたちは増産にせいを出しております。

こん年度の学げいかいでは、ほくはしぎんの金州城を歌いました。それと軍国の母をしました。お父さん元気でおいってください。

兵隊さんへよろしく。

(父の返信)

お手紙も大変よく書ける様になりました。きつとよく勉強してることと思います。お父様に負けぬ様しっかりガンバツて下さい。東京の叔父さんのお話はどうな話でしたか。知らせて下さい。寒さに負けぬこと、元気を出して一生けんめいやれば何でも出来るよ。叔父さんへよろしく。

今お父様の頭の上を友軍の飛行機が飛んでいますよ。

(ふうちゃんの手紙)

お父さんお元気ですか。私くしも元気で。お父さんのところはあついでしよう。こちらにはゆきやあられなどがふつてきます。お父さんからおくつてきた写真を見ながら、お父さんが、すいかときゅうりと、持っていらつしやるのを見ると、私くし、たべたくなりました。みんなたべたいと思っています。お父さんのところは、たびたび、くうしゅうがあるときいて、びっくりしました。

(父の返信)

でも恐くありません。決してしんばいはいりませんよ。朝でも晩でもよくありますがね。ご飯をしっかりと飲んで元気になって下さい。

こちらでは、今、ナスビ、キュウリ、カボチャの花が咲いています。大根、なつばもよく出来ています。

一月もすぐ終りですね。梅の花が咲きましたか。ツクシのボウヤがめを出すでしょう。コチラニハアリアセン。

お正月も過ぎ、一月も終り近くなりました。

(妻へ)

皆様御元気の由、安心した。度々空襲があるらしいので、気の毒に思っている。老人を抱え、種々心配のことと思うが、万事積極的に、遺憾無きを期せられ度い。過日五日は俺の誕生日だった。この日内地は雪、こちらは海の客で、仲々ことの多かつた日だったね。

当地では御蔭様で、何等不自由はないので心配しなくてよろしい。

いよいよ遂に決戦色が濃厚になった様だ。留守中は緊張して、万事に細心の注意を払う様切望する。残二、三日で二月に入る。寒さも暫くと思うが充分留意する様。俺は相変わらず大元氣。皆様へよろしく。

お父さんの任地は硫黄島でした。東京のざーと南にある小さな火山島です。島全体が飛行場にできる平らな島で、日本は国を守るために、アメリカは爆撃機の飛行場にするために、どちらにとつても重要な島でした。お父さんたちは、アメリカに硫黄島を渡さないようにと、この島に送られた決死隊でした。

お父さんからの手紙が届いて間もなく、最後の決戦の日が訪れました。アメリカ軍は爆撃機と軍艦から、雨のように爆弾を落とした後、島に上陸しました。五万人を超えるアメリカ兵と二万人あまりの日本兵の、地獄のような戦いが始まりました。

島の陥落から間もなく、アメリカの爆撃機が次々とやって来て、日本中の町に爆弾を落とすようになりました。

五月も半ばを過ぎたころ、ひさ君のお母さんに一通のほきが届きました。兵士となり、沖縄の戦いに臨んでいるお父さんの教え子からでした。

終章 青い目の人形のそれから

日本の何十倍もの国力を持つアメリカとの戦争は、長引けば長引くほど日本を苦しめました。それでも、神の国日本の力を信じる大人たちは戦争を貫きました。少年たちは、故郷や家族を守るため、進んで兵隊になり、我が子を思う母たちは涙を隠して戦地に送り出しました。父や兄達も家族のためと闘い、日本に残った人々は銃後の守りをしっかりと、飢えや空襲に堪えていました。

ようやく戦争は終わりました。日本は負けました。

昭和の初めに日本にやってきた青い目のお人形のこと、もうすっかり忘れ去られてしまいました。

終戦から三十年を過ぎたころ、あの青い目のお人形のこと



が話題になりました。壊されていくお人形を守ろうと隠していた先生たちが他にもたくさんいたのです。

大隈小学校のベッギイは、マツエ先生といっしょにひっそりと過ごしていました。一度は大隈の町を離れたこともありましたが、先生の弟のうちに赤ちゃんが生まれた時、また大隈に帰ってきました。

そして、終戦の日から四十年が過ぎたころ、ふたたび大隈小学校の子どもたちのもとに戻ってきたのです。少しすずけていましたが、先生に大切にされていたベッギイは、ほころびひとつなく愛らしい表情のままでした。

小学校では、戦争があつたころの子どもたちの孫たちが、ベッギイを大歓迎しました。

いま日本では、戦争で死んでいく人はいません。戦争のために家族がバラバラにされることもありません。戦争のために勉強ができず、食べるものもなく、我慢ばかりすることもありません。誰もが命を大切にすることができますのです。

太平洋戦争で武器を持って戦った兵士の中には、友情の青い目のお人形をおくったアメリカの子どもたちと大歓迎した日本の子どもたちもたくさんいました。

つらい戦争の時代を生き抜いたベッギイは、今もなお、子どもたちに平和のありがたさ、命の大切さを語りかけています。